

豫楽院 近衛家熙公年譜稿(五)

緑川明憲

本稿は、前号『京都大学國文學論叢』第二十六号)所載の蕪稿「豫楽院 近衛家熙公年譜稿(四)」の続きである。凡例については、『京都大学國文學論叢』第二十三号及び第二十五号を参照されたい。

〔附記〕

この年譜の作成にあたり、資料などの閲覧を常に快く認めて下さいます、財団法人陽明文庫 文庫長の名和修先生に厚く御礼申し上げます。

享保十二年(一七二七)丁未 六十一歳

●一月一日、午後、今出川の近衛家本邸で行われた小朝拝を見る。(槐記)

●一月二日、御謡始及び御香始。御香始は「无上法院ノ御時ヨリ」とあるので、遅くとも元禄十五年以前より行っていたことがわかる。(槐記)

●一月五日、進藤一葉(俗名長之)卒、享年六十三。長之は輪王寺宮諸大夫進藤長昌の次男で、のち近衛家諸大夫進藤長房の養子となった。寛文五年生まれで家熙とは僅か二歳しか違わず、

「此人ハ御家ニ於テ大功勞ノ人ニテ、サレバコソ官加階ハ家柄ノコト、落飾マデ御相伴ニテ、一生ノ果報イミジキ人」と評される如く、よく近衛家と家熙に仕えた。(基熙・秘鈔・槐記)

●一月十六日、三時知恩寺門跡尊融尼が来邸し、香を二座行う。(槐記)

●一月二十一日、御茶湯始。客は連歌師の猪苗代兼竹・治部大輔今大路孝在・松井主殿。(御茶湯)

●一月二十六日、『般若心経』一卷を楷書体で書写。(大覚寺蔵・京都国立博物館『古写経―聖なる文字の世界―』展図録)

●一月二十八日、茶の湯を催す。客は有隣軒鷹司輔信・自在軒土肥二三・伝之丞(小谷伝之丞か)。(御茶湯)

●一月三十日、茶の湯を催す。客は法眼木下道正庵承順及び吉田幸節。(御茶湯)同日、医師の村上等全及び山科道安とともに、香を二座行う。(槐記)

●閏一月二日、家熙に仕える女房の吉岡局、常陸と改称。同じく於秀も玉の井と改称。(雑事日記・槐記)

●閏一月二十三日、茶の湯を催す。客は深諦院及び山科道安。夜には十種香を一座行う。(御茶湯・槐記)

●閏一月二十六日、昼、三時知恩寺へ出掛ける。供は進藤夕翁

及び山科道安。同寺で香を二座行う。四ツに帰宅。(槐記)

●二月五日、午刻、右大将鷹司房熙・主計(鷹司家諸大夫の主計頭小林貞祐か)・兵部(鷹司家諸大夫の兵部少輔牧義知か)・儒者の松下見櫟・山科道安が来邸。見櫟が物外楼の詩を賦し、これに和す。夜には十種香を行った。(槐記)

●二月二十三日、青蓮院宮尊祐親王より『多武峰縁起』の書写を依頼される。(雑事日記)

●三月二日、嵯峨や嵐山、大覚寺を遊覧。夕食を摂ったあとで帰宅。(槐記)

●三月十二日、大徳寺塔頭の芳春院へ出掛ける。供は左馬頭進藤長富。茶の湯にも参加している。(槐記)

●春、右大将鷹司房熙及び山科道安が、家熙のもとで茶の湯の稽古を始める。(槐記)

●四月三日、午後、左馬頭進藤長富宅での茶の湯に参加。相伴は山科道安。この時長富は家熙に花の所望をし、河骨一種を生けている。(槐記)

●四月四日、今出川の近衛家本邸大書院で、興福寺什物の「華原磐」などが開帳。家熙をはじめ、「御出入ノ者、御家来マデ」が見物。(槐記)

●四月九日、堀川御殿「清水の間」を河原御殿に移築。(槐記)

●四月十五日、右大将鷹司房熙及び三時知恩寺門跡尊融尼が、新たに増築された河原御殿へ初めて来邸。(槐記)

●四月二十六日、水戸藩京屋敷より「古事記」三冊が届けられる。(雑事日記)

●五月四日、御風炉始。客は有隣軒鷹司輔信・御蘭意斎・自在軒土肥二三。(御茶湯)

●五月八日、茶の湯を催す。客は禁裏(中御門院) 附武士の市正村上正直及び大工頭の中井主水正豊。(御茶湯)

●五月十一日、茶の湯を催す。客は前権大納言坊城俊清及び法眼木下道正庵承順。(御茶湯)

●五月十三日、茶の湯を催す。客は左馬頭進藤長富及び久田宗也。(御茶湯)

●五月十八日、茶の湯を催す。客は深諦院及び山科道安。(御茶湯・槐記)

●五月、河内・道明寺の什物がごく内密のうちに河原御殿で開帳、伝菅原道真筆「楊枝の御影」などを見る。(槐記)

●六月十二日、弘前藩主の土佐守津軽信寿より、伝武野紹陽所持とされる小平蜘蛛の釜一口などを贈られる。(雑事日記)

●七月五日、『旧事記』の書写を岡本要人に命ずる。(雑事日記)

●七月九日、鹿兒島藩士の倉橋金之丞が来邸し、御助力金二百五十両を贈られる。(雑事日記)

●七月十三日、津軽藩士の村上儀兵衛が来邸し、御合力金七十五両を贈られる。(雑事日記)

●八月十八日、辰刻、儲君昭仁親王が今出川の近衛家本邸へ行啓。(雑事日記・槐記)

●十月二日、戌刻、異母妹で閑院宮直仁親王御息所の八百君薨去、享年二十二。法号、功德池院映岳月馨大姉。廬山寺に葬られる。(雑事日記・繰出)

●十一月二十五日、口切りの茶の湯を催す。客は左馬頭進藤長富及び久田宗也。(御茶湯) 同日、寒中見舞いとして天英院に水入菜及び沖津鯛を贈る。(雑事日記)

●十二月三日、茶の湯を催す。客は有隣軒鷹司輔信・自在軒土

肥二三・伝之丞（小谷伝之丞か）。（御茶湯・槐記）

●十二月七日、茶の湯を催す。客は右大将鷹司房熙・鷹司家諸大夫の牧梅翁（義広）・外科医の大町淳庵。（御茶湯）

●十二月八日、尾張藩主徳川家より御助力米百石（代金約七十三両）を贈られる。（雑事日記）

●十二月九日、午後、左馬頭進藤長富宅での茶の湯に参加。相伴は山科道安。（槐記）

●十二月十日、茶の湯を催す。客は深諦院及び山科道安。（御茶湯・槐記）

●十二月十六日、石見守中川長堅宅での茶の湯に参加。相伴は御菌意斎及び山科道安。（槐記）

●十二月十八日、今出川の近衛家本邸での年忘れに参加。ほかに左大将鷹司房熙・三時知恩寺門跡尊融尼・芳林院・山科道安たちも参加。（槐記）

●十二月、東宮御所へ出掛け、儲君昭仁親王が用いる『孝経』（侍読伏原宣通より献上されたもの。貞享年間版）を見る。この本の誤りの多さに気づき、近衛家所蔵の「玄宗ノ石刻ノ孝経」を書写して親王と宣通に贈ることを伝える。（槐記）

★此年、毎月十四日に『般若心経』を書写。十四日は基熙の命日にあたる。『陽明墨宝』春名好重氏解説）

享保十三年（一七二八）戊申 六十二歳

●一月七日、午後、御茶湯始。客は左馬頭進藤長富及び久田宗也。しかし久田宗也の急病によって、石見守中川長堅が代わりとなるも、最終的には中止されたらしい。（御茶湯・槐記）

●一月三十日、茶の湯を催す。客は御菌意斎・山本恕軒・自在

軒土肥二三。（御茶湯）

●二月五日、茶の湯を催す。客は法眼木下道正庵承順及び吉田幸節。（御茶湯）

●二月十二日、茶の湯を催す。客は上田養安及び山科道安。（御茶湯・槐記）

●二月十八日、茶の湯を催す。客は有隣軒鷹司輔信・御菌意斎・自在軒土肥二三。（御茶湯）

●二月二十日、石清水八幡宮へ参詣。同行は三時知恩寺門跡尊融尼・牧如石・山科道安たち。（槐記）

●三月十九日、下鴨の松林院での茶の湯に参加。保君も同行。（槐記）

●三月二十四日、午半刻、左馬頭進藤長富宅での茶の湯に参加。相伴は左大将鷹司房熙及び山科道安。（槐記）

●三月三十日、御風炉始。客は左馬頭進藤長富及び久田宗也。（御茶湯）

●四月二日、茶の湯を催す。客は有隣軒鷹司輔信・自在軒土肥二三・伝之丞（小谷伝之丞か）。（御茶湯）

●四月三日、茶の湯を催す。客は深諦院及び山科道安。（御茶湯・槐記）

●四月五日、茶の湯を催す。客は上田養安・按摩の喜多村（北村）利旦・山科一安。（御茶湯ほか）喜多村利旦は堺町通二条下ル町に住んだ按摩。『槐記』享保十四年六月二十五日条に「箕居弓居ノ文字アリ。覚ヘズヤト仰ラル。若シ按摩ノ書ナドニハナキヤ。尋ヌベシト。北村利旦ヘ問ニ遣ハセシガ」云々とある。

●四月十一日、閑院宮直仁親王・内大臣櫛笥隆質・左中将八条隆英を招いて馳走。この時隆英が賦した「陪彈正親王上准后藤

公之物外楼」詩に和している。(槐記)

●四月二十九日、茶の湯を催す。客は御蘭意斎・山科道安・医師の鳥井道乙。(御茶湯・槐記)

●五月十七日、茶の湯を催す。客は九峯自端及び松林院。(御茶湯)

●五月二十日、午過ぎ、御蘭意斎が御茶献上。相伴は上田養安及び山科道安。(槐記)

●六月十一日、家熙著のひとつ『立太子次第』を左大弁坊城俊将が借りて書写。『立太子次第』は少なくともこの年以前に成立していたことがわかる。(国立公文書館蔵『立太子次第』)

●六月二十二日、進藤夕翁の所望により、内蔵助大石良雄が上野介吉良義央を討ったことを記念する碑の篆額「忠義碑」三文字を揮毫。表文は水戸彰考館総裁の栗山潜鋒。大石良雄の四代前の内蔵助の母は、左馬頭進藤長富の六代前の筑後守長治の娘で、進藤家と大石家とは遠縁同士。(秘鈔・猪熊信男氏『近衛家熙公小伝』)

●七月十日、鹿児島藩より御助力金百五十兩を贈られる。(雑事日記)

●九月十日、夜、息子の保君没、享年九。法号、香厳院奇峯元秀童子。西王寺に葬られる。(秘鈔)

●十月十五日、嵯峨を遊覧。右大臣一条兼香及び三時知恩寺門跡尊融尼が同行、供は玉の井局(旧名は於秀・笹・山科道安ら。(雑事日記・槐記)

●十月十八日、口切りの茶の湯を催す。客は左馬頭進藤長富・久田宗也・松井主殿。(御茶湯)

●十月二十一日、茶の湯を催す。客は上田養安及び御園意斎。

(御茶湯)

●十月二十六日、午前、大徳寺塔頭の芳春院での茶の湯に参加。相伴は山科道安。(槐記)

●十月二十七日、午前、茶の湯を催す。客は山科道安・大町淳庵・鳥井道乙。(御茶湯・槐記)

●十月二十九日、下鴨の松林院での茶の湯に参加。相伴は山科道安及び左馬頭進藤長富。(槐記)

●十一月三日、午半刻、左馬頭進藤長富宅での茶の湯に参加。相伴は石見守中川長堅及び山科道安。(槐記)

●十一月四日、久田宗也が御茶献上。相伴は上田養安及び山科道安。(槐記)

●十一月九日、茶の湯を催す。客は自在軒土肥二三及び山科一安。(御茶湯)

●十一月十一日、茶の湯を催す。客は百拙元養・九峯自端・松林院。(御茶湯)

●十一月十三日、茶の湯を催す。客は深諦院及び山科道安。(御茶湯・槐記)

●十一月十七日、西王寺での茶の湯に参加。亭主は九峯自端である。相伴は百拙元養及び山科道安。(槐記)

●十一月十八日、茶の湯を催す。客は龍巖宗棟・太玄宗珊・竺嶺宗伍。(御茶湯)

●十一月十九日、尾張藩主徳川家より御助力米百石(代金約七十九両と銀約七匁)を贈られる。(雑事日記)

●十一月二十日、下岡崎の家熙別業又得庵での茶の湯に参加。亭主は百拙元養。相伴は山科道安及び旭峯。(槐記)

●十二月二日、茶の湯を催す。客は前権大納言坊城俊清・前権

中納言六条有藤・三位桜井氏敦。(御茶湯)

●十二月九日、茶の湯を催す。客は有隣軒鷹司輔信・自在軒土肥二三・伝之丞(小谷伝之丞か)。(御茶湯)

●十二月十一日、近衛家侍の安平次主殿が御茶献上。相伴は山科道安。(槐記)

●十二月十二日、茶の湯を催す。客は法眼木下道正庵承順及び山本恕軒。(御茶湯) 同日、十七日の東山院御経供養に用いる諷誦文及び願文の書写を命ぜられる。料紙は蠟引の白紙で、上下一寸は裏から折り返し、紅煤竹色の紙の上に諷誦文は銀の切箔、願文には金の切箔を蒔く。(雑事日記・槐記)

●十二月十三日、茶の湯を催す。客は内大臣鷹司房熙及び鷹司家諸大夫の主計頭小林貞祐。(御茶湯)

●十二月十七日、諷誦願文の下書き(二通)を行う。(『近衛家熙公遺墨展覽会目録』)

●十二月大晦日、香を一座行う。「御例ノ如ク」とあり、この年以前から毎年大晦日に行っていたことがわかる。(槐記)

★此年以前、家熙撰の『流代草書』四冊が完成。(遺墨・新『書道全集』22・センチュリー文化財団蔵)

享保十四年(一七二九)己酉 六十三歳

●一月七日、午半刻、御茶湯始。客は山科道安及び自在軒土肥二三。また、この時謡や香も行われた。(御茶湯・槐記)

●二月八日、今出川の近衛家本邸へ出掛け、京都所司代の佐渡守牧野英成と対面。暮れ過ぎに帰宅。(槐記)

●二月十六日、三時知恩寺へ出掛け、夜に「賭物ノ御香」を行う。参加者は家熙・三時知恩寺門跡尊融尼・常陸局(もと吉岡

局)・於佐衛(奥勤めの女房)・右京権大夫錦小路頼庸・山科道安。(雑事日記・槐記)

●二月二十五日、尾張藩主徳川家より御助力米代金約六十五両と銀約二匁を贈られる。(雑事日記)

●二月二十六日、大徳寺塔頭の龍光院での茶の湯に参加。亭主不明(龍光院住持か)。相伴は山科道安。この時希望により龍光院什物の「引出棚」を見る。(槐記)

●二月二十八日、茶の湯を催す。客は有隣軒鷹司輔信・御蘭意斎・自在軒土肥二三。(御茶湯)

●三月二日、茶の湯を催す。客は一乗院宮尊昭親王及び御蘭意斎。(御茶湯)

●三月四日、法眼木下道正庵承順が御茶献上。相伴は山科道安及び山本恕軒。「大ウ出来タル由。御褒美」という茶事であった。(槐記)

●三月九日、山本恕軒が御茶献上。相伴は内大臣鷹司房熙・山科道安・法眼木下道正庵承順。(槐記)

●三月二十日、前関白二条綱平が来邸し、落飾に関する報告を受ける。綱平の落飾はこの年四月二十九日。(槐記・『諸家伝』)

●三月二十九日、内大臣鷹司房熙邸での茶の湯に参加。相伴は山科道安及び松下見櫓。(槐記)

●四月九日、桜御所の藤の花を見、午刻に三時知恩寺へ出掛ける。供は治部大輔今大路孝在・玉の井局・山科道安。(槐記)

●四月十三日、左馬頭進藤長富宅での茶の湯に参加。相伴は内大臣鷹司房熙及び山科道安。(槐記)

●四月二十八日、広南より渡来した象を見る。(雑事日記・繰出)

●五月四日、茶の湯を催す。客は内大臣鷹司房熙・山科道安・大町淳庵。(御茶湯・槐記)

●五月六日、大覚寺門跡相統に關し、息子の律君に相統させるべき旨を武家伝奏へ届け出る。(繰出)

●六月十三日、朝五ツ、内大臣鷹司房熙邸での茶の湯に参加。相伴は山科道安。(槐記)

●七月四日、鹿兒島藩主島津家より御合力金二百五十兩を贈られる。(雑事日記)

●七月十一日、六月に禁裏より、屏風に仕立てるため唐・李徳裕撰『丹扆箴』六枚を唐紙一紙ずつに書写することを命ぜられ、七月初めに献上。家熙の書を見た中御門院の歡感は斜めならず、札としてこの日に宸翰・瑪瑙の筆立て・唐紙二百枚を勅賜。家熙筆の屏風は「草書六箴屏風」(御物)として現存。(秘鈔・宮内庁三の丸尚藏館『近衛家熙―風雅の探求』展図録)

●八月二日、弘前藩主津輕家より御助力金七十五兩を贈られる。(雑事日記)

●九月八日、越中守津輕信興室となつていた養女の綱君(醍醐昭尹の妹)没。法号、梅応院。(雑事日記)

●閏九月十二日、口切りの茶の湯を催す。客は左馬頭進藤長富・久田宗也・裏千家七世の最々斎千宗乾。(御茶湯)

●閏九月十三日、午半刻、内大臣鷹司房熙邸での茶の湯に参加。相伴は山科道安。(槐記)

●閏九月十五日、茶の湯を催す。客は禁裏(中御門院)附武士の市正村上正直・大工頭の中井主水正豊・御蘭意斎。(御茶湯)

●閏九月十七日、茶の湯を催す。客は百拙元養・九峯自端・松林院。(御茶湯)

●閏九月二十一日、『賓退録』を校合。(槐記)

●閏九月二十二日、今出川の近衛家本邸での口切りの茶の湯に参加。参加者はほかに三時知恩寺門跡尊融尼・内大臣鷹司房熙・三宝院門跡実演。囃子や仕舞も催された。(槐記ほか)

●閏九月二十三日、茶の湯を催す。客は自在軒土肥二三及び山科一安。(御茶湯)

●閏九月二十七日、茶の湯を催す。客は上田養安及び山本恕軒。(御茶湯)

●十月八日、茶の湯を催す。客は法眼木下道正庵承順及び吉田幸節。(御茶湯)

●十月十一日、茶の湯を催す。客は内大臣鷹司房熙・山科道安・大町淳庵。(御茶湯・槐記)

●十月十六日、茶の湯を催す。客は一乗院宮尊昭親王及び百拙元養。(御茶湯)

●十月十七日、未前刻、下鴨の松林院での茶の湯に参加。相伴は旭峯及び山科道安。(槐記)

●十月十九日、左馬頭進藤長富宅での茶の湯に参加。相伴は内大臣鷹司房熙及び山科道安。(槐記)

●十月二十二日、茶の湯を催す。客は有隣軒鷹司輔信・自在軒土肥二三・御蘭意斎。(御茶湯・槐記)

●十月二十六日、夜、香を二座行う。(槐記)

●十一月四日、茶の湯を催す。客は前権大納言坊城俊清・権中納言高辻総長・法眼木下道正庵承順。(御茶湯)

●十二月一日、午半刻、石見守中川長堅宅での茶の湯に参加。相伴は内大臣鷹司房熙及び山科道安。(槐記)

●十二月大晦日、香を行う。出席者は玉の井局・佐江(於佐衛

か）・山科道安・上野介（近衛家諸大夫の上野介中川長統か）・岡本要人。（槐記）

享保十五年（一七三〇）庚戌 六十四歳

●一月七日、御茶湯始。客は自在軒土肥二三及び山科道安。（御茶湯・槐記）

●二月十二日、近衛家侍の中原榎松、元服を仰せつけられる。中原榎松はのち中原織部、さらに近衛家諸大夫の佐竹家の養子となり重威と改名。のちに大師流の能書となり、書博士及び甲斐守に任ぜられた。家熙に近侍し、その書風を学んだひとり。（繰出・佐竹重威墓碑銘・『経熙公記』）

●三月三十日、茶の湯を催す。客は一乗院宮尊昭親王・惣珠院・百拙元養。（御茶湯）

●四月二十四日、申刻、鷹司家へ養子に入っていた前内大臣房熙薨去、享年二十一。法号、清浄林院。二尊院に葬られる。（雑事日記ほか）

●六月二十日、未刻、上立売通室町西入ル北側にある御用呉服商の大文字屋五兵衛方から出火。西陣一帯が被災した（西陣焼け）。近衛家別邸の桜御所もこの時罹災。（雑事日記）

●六月、息子の岩君、鷹司家諸大夫らの願いにより鷹司家へ養子に入ることが決定。（槐記）

●七月十四日、近衛家に仕える神坂自休・吉村宗寿・山本喜平次・堀内源清の四名を奉行に任じ、六月二十一日の火災に罹災した者への施行を命ずる。（秘抄）

●十月六日、口切りの茶の湯を催す。客は一乗院宮尊昭親王・百拙元養・一乗院宮諸大夫の右京大進中沼秀延。（御茶湯）

●十月十三日、茶の湯を催す。客は有隣軒鷹司輔信・御菌意斎・北村自丹。（御茶湯）

●十月二十日、麻疹に罹患。諸方より見舞いの品々が贈られる。（雑事日記）

●十一月二十二日、麻疹が全快。（雑事日記）

★この年に出版された『新後明題和歌集』に、家熙詠七首が入集。

享保十六年（一七三一）辛亥 六十五歳

●一月四日、元日に献上された山科道安の詩に和して、試筆とする。家熙賦「旧年養疾弘塵席、和気迎陽山水頭、嘗醴喫茶拋菓釜、一樓花月富春秋」（槐記）

●一月七日、御茶湯始。客は山科道安及び自在軒土肥二三。（御茶湯・槐記）

●一月二十三日、茶の湯を催す。客は鳥井道乙及び久田宗也。（御茶湯）

●一月二十五日、茶の湯を催す。客は上田養安及び山本恕軒。（御茶湯）

●二月二日、茶の湯を催す。客は法眼木下道正庵承順及び吉田幸節。（御茶湯）

●二月十日、茶の湯を催す。客は御菌意斎・大町淳庵・山科一安。（御茶湯・槐記）

●二月十一日、茶の湯を催す。客は前権大納言坊城俊清及び権中納言高辻総長。（御茶湯）

●二月二十三日、午後、茶の湯を催す。客は権中納言坊城俊将・侍従阿野実惟・御菌意斎。（御茶湯・槐記）

●二月二十五日ごろ、御蘭意斎が所持する土佐光信筆の絵画を写すべく取り寄せたが土佐派の筆ではないと鑑定、そのまま返却。(槐記)

●二月二十七日、山本恕軒が御茶献上。相伴は御蘭意斎及び山科道安。(槐記)

●二月三十日、茶の湯を催す。客は九峯自端及び松林院。(御茶湯)

●三月六日、青蓮院宮尊祐親王が来邸し、『十二月花鳥和歌』の外題二枚の書写を依頼される。(雑事日記)

●三月十四日、左馬頭進藤長富卒、享年三十六。香典として金五百疋を贈る。(雑事日記・『地下家伝』)

●三月二十八日、茶の湯を催す。客は一乗院宮尊昭親王・百拙元養・右京大進中沼秀延。(御茶湯)

●四月十五日、茶の湯を催す。客は京都所司代の河内守牧野英成及び御蘭意斎。(御茶湯・槐記)

●四月二十五日、今出川の近衛家本邸で、奈良の興福寺什物が開帳される。(槐記)

●四月二十七日、大徳寺へ参詣。帰りに大徳寺塔頭の寸松庵へ立ち寄り茶の湯に参加。相伴は大町淳庵及び山科道安。(槐記)

●四月二十九日、法眼木下道正庵承順が御茶献上。相伴は大町淳庵及び山科道安。(槐記)

●五月二十一日、茶の湯を催す。客は惣珠院及び山本恕軒。(御茶湯)

●六月十五日、『教誡経』を楷書体で書写。(遺墨)

●六月二十五日、掛物類の虫払いを行う。山科道安・近衛家お抱え絵師の渡辺求馬・岡本要人を側に控えさせた。(槐記)

●九月十四日、大徳寺へ参詣。大徳寺法堂内に貼つてある家熙筆『維摩経』のうち、「若」の一字が「苦」と書き誤っていた。そこで家熙は「苦」一字分を切り取って張り直すことを伝えたが、龍巖宗棟が「苦」の脇に「若」を書き添えて欲しいと願ったため、その通りに書き添える。(槐記)

●十月六日、午刻、今出川の近衛家本邸で催された口切りの茶の湯に参加。(槐記)

●十月十一日、嵯峨や嵐山を遊覧。供は入道良寛(≡滋野井公澄)・松下見樸・山科道安。(槐記)

●十月二十二日、口切りの茶の湯を催す。客は上田養安及び山本恕軒。(御茶湯)

●十月三十日、茶の湯を催す。客は山科道安及び大町淳庵。(御茶湯)

●十一月三日、奈良の興福寺へ奉納した自筆の經典の供養が行われる。(雑事日記)

●十一月二十一日、茶の湯を催す。客は法眼木下道正庵承順及び吉田幸節。(御茶湯)

●十一月二十二日、茶の湯を催す。客は大町淳庵及び山科道安。(槐記)

●十一月二十五日、茶の湯を催す。客は九峯自端及び松林院。(御茶湯)

●十二月二十九日、香を二座行う。(槐記)

享保十七年(一七三二)壬子 六十六歳

●一月七日、御茶湯始。客は山科道安及び久田宗也。(御茶湯・槐記)

●三月十八日、律君とともに東本願寺へ出掛ける。供は松下見櫟及び山科道安。(槐記)

●三月二十四日、下鴨の松林院での茶の湯に参加。相伴は大膳大夫進藤(中川改め)長堅及び山科道安。(槐記)

●四月三日、岩屋山普光院より所望されていた「不動之影之經文」を書写して奉納。(雑事日記)

●四月十四日、大徳寺参詣の帰りに三時知恩寺に立ち寄る。供は入道良寛・大膳大夫進藤長堅・常陸局・於佐衛・山科道安。(槐記)

●四月十六日、『一乗二品親王回向文』を書写。「一乗二品親王」はおそらく故真敬親王(寛文五年三月二十六日に叙二品)を指すと思われる。『近衛家熙公遺墨展覽会目録』

●閏五月十五日、唐招提寺の宝物が今出川の近衛家本邸で開帳、三時知恩寺門跡尊融尼や芳林院たちと見る。(雑事日記)

●六月十七日、『儀礼札記』を講釈。聴講した者は入道良寛・百拙元養・九峯自端・松下見櫟・在京の広島藩儒堀南湖・山科道安。(槐記)

●十月二十三日、この年八月六日に崩御した靈元院の形見として「唐絵御掛物」及び「御脇息」を贈られる。(雑事日記)

●十月二十四日、今出川の近衛家本邸で催された口切りの茶の湯に参加。客はほかに三時知恩寺門跡尊融尼たち。(槐記)

●十一月十一日、茶の湯を催す。客は山本恕軒及び久田宗也。

(御茶湯)

●十一月二十日、口切りの茶の湯を催す。客は山科道安及び大町淳庵。(御茶湯・槐記)

●十一月二十三日、茶の湯を催す。客は上田養安及び村上等全。

(御茶湯)

●十二月二十九日、香を一座行う。(槐記)

享保十八年(一七三三)癸丑 六十七歳

●一月十六日、夜、三時知恩寺門跡尊融尼・芳林院・右京権大夫錦小路頼庸・山科道安たちと「賭物ノ御香」を行う。(槐記)

●二月十三日、鷹司家に養子に入った岩君が元服し、尚輔と改名。(雑事日記)

●三月六日、朝、右少將鷹司尚輔、疱疹のため卒、享年八。法号、了義院。二尊院に葬られる。(雑事日記・『陽明家系譜』)

●四月九日、正午、茶の湯を催す。客は右京権大夫錦小路頼庸・百拙元養・山科道安。(御茶湯・槐記)

●四月十五日、妙法院宮堯恕親王筆「摩多羅神図」を前大僧正円恕及び前権大納言外山光顕が写し、その題を揮毫。(陽明文庫蔵/函架番号八九五二二)

●四月十六日、洛東吉田の春日社に参詣の後、神楽岡や真如堂周辺を遊覧。昼前に上岡崎の右京権大夫錦小路頼庸別邸での茶の湯に参加。相伴は山科道安。(槐記)

●四月十八日、茶の湯を催す。客は大工頭の中井主水正豊及び御菌意斎。(御茶湯)

●六月十三日、妙顕寺僧の日瑛が来邸、紫衣勅許の礼として花一筒及び「玉水古物茶入」を贈られる。(雑事日記)

●九月七日、三宝院門跡の権僧正実演(音君)寂。法号、後金剛輪院。(門跡伝・『陽明家系譜』)

●十月八日、中御門院より十二月十三日に行われる法華八講に用いる願文及び呪願文の書写を命ぜられる。(雑事日記) 同日、

三時知恩寺門跡尊融尼のもとへ出掛ける。夜半に帰宅。供は九峯自端及び山科道安。(槐記)

●十月十九日、芳林院のもとへ出掛ける。夜半に帰宅。供は右京權大夫錦小路頼庸及び山科道安。(槐記)

●十月二十日、中御門院より法華八講に用いる『阿弥陀經』の書写を命ぜられる。(雜事日記)

●十月二十二日、百拙元養宅での茶の湯に参加。相伴は九峯自端及び山科道安。(槐記)

●十月二十五日、律君が御茶献上。相伴は山科道安。(槐記)

●十月二十六日、西王寺での茶の湯に参加。相伴は百拙元養及び山科道安。(槐記)

●十一月一日、大膳大夫進藤長堅宅での茶の湯に参加。相伴は律君及び山科道安。(槐記)

●十一月二日、茶の湯を催す。客は上田養安・山本恕軒・村上等全。(御茶湯)

●十一月五日、大和・多武峰への代参を岡本要人に命ずる。(雜事日記)

●十一月十日、茶の湯を催す。客は百拙元養及び九峯自端。(御茶湯)

●十一月十五日、法華八講に用いる願文及び呪願文の草案が到来し、書写。翌十六日に献上。(雜事日記)

●十一月二十四日、茶の湯を催す。客は吉田幸節及び法眼木下道正庵承順。(御茶湯)

●十一月二十九日、茶の湯を催す。客は前權大納言坊城俊清及び權中納言高辻総長。(御茶湯)

られる。(雜事日記)

●十二月三日、茶の湯を催す。客は有隣軒鷹司輔信・御菌意斎・小侍従(女房か)。(御茶湯)

●十二月五日、茶の湯を催す。客は阿野中納言(公緒か。ただしこの時前權大納言)・風早宰相(実積か。ただしこの時右中将)・小栗雅楽頭(上御靈社社家の小栗栖邦定か)。(御茶湯)

●十二月大晦日、香を一座行う。(槐記)

享保十九年(一七三四)甲寅 六十八歳

●一月七日、御茶湯始。客は山科道安及び大町淳庵。(御茶湯・槐記)

●一月二十九日、山科道安が御茶献上。相伴は律君及び安平次主殿。(槐記)

●二月四日、律君の大覚寺入寺直前にあたり、茶の湯を催す。客は三時知恩寺門跡尊融尼・律君・山科道安。(御茶湯・槐記)

●二月九日、律君が、大覚寺に入寺し得度。法号、寛深。(『陽明家系譜』・『門跡伝』)

●二月十二日、嵯峨の大覚寺に出掛ける。(雜事日記)

●二月十四日、長崎奉行の因幡守細井安明より、年始の挨拶として唐紙一束・唐筆・唐墨を贈られる。(雜事日記)

●二月二十二日、後西院の五十回忌に際し、茶の湯を催す。客は三時知恩寺門跡尊融尼・大覚寺門跡寛深・山科道安。(御茶湯・槐記)

●三月十日・十二日、嵯峨の大覚寺へ出掛ける。(槐記)

●三月二十一日、弘法大師九百年忌祭文を書写。(遺墨)

●三月下旬、弘法大師九百年忌に際し、『大毘盧遮那經』及び

『般若理趣經』を楷書体で書写。(遺墨)

●四月五日、桜御所へ出掛け、藤の花を見る。帰途、三時知恩寺門跡尊融尼のもとへ立ち寄る。供は山科道安。(槐記)

●四月十一日、茶の湯を催す。客は三時知恩寺門跡尊融尼・右京権大夫錦小路頼庸・山科道安。(御茶湯・槐記)

●四月二十九日、大町淳庵が御茶献上。相伴は三時知恩寺門跡尊融尼・大覚寺門跡寛深・山科道安。(槐記)

●五月一日、孫の内前が、初めて河原御殿に来邸。内前より御太刀馬代銀一枚及び一種を贈られる。家熙は内前に引出物として『行成真跡朗詠全部御書物』一箱(『粘葉本和漢朗詠集』か)などを贈る。(雑事日記)

●六月二十九日、天英院の媒により、孫娘の森君と右衛門督田安宗武との婚姻が決定。(雑事日記)

●六月上旬、摂津・西成郡にある在栖山観音堂(俗称は新清水寺)が所蔵する伝小野道風筆『秋萩帖』を臨摸。(陽明文庫蔵／函架番号九二九五八)

●八月十六日、二十六日に行われる常子内親王三十三回忌の法要の際に、『音楽』を催すことを決める。(雑事日記)

●八月二十三日、西王寺で常子内親王三十三回忌の法要があり、辰刻より午刻まで懺法が行われる。法事料として金五両、香典として三百疋を奉納。(雑事日記)

●八月二十四日、天英院と共同で、大徳寺で常子内親王三十三回忌の法要を行う。卯上刻に施食、半斎、『大悲神呪』の供養が行われる。(雑事日記)

●八月二十五日、天英院と共同で、大徳寺で常子内親王三十三回忌の法要を行う。辰刻に衆懺法、未刻に『金剛経』の供養が

それぞれ行われる。(雑事日記)

●八月二十六日、天英院と共同で、大徳寺で常子内親王三十三回忌の法要を行う。卯上刻より『大悲神呪』の供養、僧月洲による拈香、半斎、『楞嚴神呪』の供養が行われる。(雑事日記)

●九月二十三日、嵯峨の大覚寺へ出掛ける。(槐記)

●九月二十四日、京都西町奉行の筑後守本多忠英より、自作の篋一本を贈られる。その礼として和歌一首を詠ずる。(槐記)

●九月二十六日、妙法院に出掛け、書院で堯恭親王と対面。茸狩りなどを楽しみ、西半刻に帰宅。入道良寛及び松下見樸も同席。(堯恭法親王日記)

●九月、京都町奉行所与力の手嶋郷右衛門の願により、自らが作った竹筒の花入(一重切)を与える。(秘鈔)

●九月下旬、『重脩物外廬記』を著し、書写。(陽明文庫蔵・『陽明墨宝』春名好重氏解説・新『書道全集』22)

●十月四日、右京権大夫錦小路頼庸宅での茶の湯に参加。相伴は山科道安。(槐記)

●十月六日、八日、嵯峨の大覚寺へ出掛ける。(槐記)

●十月十三日、徳川家宣二十三回忌に際し、知恩院に納経。(雑事日記)

●十月二十三日、今出川の近衛家本邸に鹿兒島藩お抱え絵師の木村探元が来邸、唐筆一箱及び石本一箱を贈られる。(雑事日記・京記)

●十月二十四日、入道良寛宅に出掛ける。供は山科道安・松下見樸・堀南湖。(槐記)

●十月二十五日、長崎奉行の因幡守細井安明が、江戸下向に際し京へ滞留。安明へ粕漬一桶を贈る。(雑事日記)

●十一月七日、三位吉田兼雄宅に出掛ける。供は左中将八条隆英及び山科道安。(槐記)

●十一月九日、茶の湯を催す。客は参議阿野実惟及び参議万里小路植房。(御茶湯)

●十一月十二日、享保十七年より行っていた『春日権現験記絵巻』(奈良・春日社の社家西左近将監藏。現在は宮内庁三の丸尚蔵館藏)二十巻の摸写が完成し、河原御殿より今出川の近衛家本邸に届けられる。詞書は家熙筆、絵は渡辺求馬筆。この日褒美として求馬に白銀十枚及び縮緬一反を贈る。新写の『春日権現験記絵巻』は近衛家の文庫に納められ、「御珍蔵物也」とされた。(雑事日記)

●十一月十五日、三時知恩寺門跡尊融尼の私宅での茶の湯に参加。相伴は常陸局・兵部卿(女房か)・大膳大夫進藤長堅・山科道安。(槐記)

●十一月十六日、茶の湯を催す。客は三時知恩寺門跡尊融尼・大覚寺門跡寛深・右京権大夫錦小路頼庸・山科道安。(御茶湯・槐記)

●十一月十九日、茶の湯を催す。客は上田養安及び村上等全。(御茶湯)

●十一月二十日、茶の湯を催す。客は御菌意斎・山本恕軒・久田宗也。(御茶湯)

●十一月二十八日、茶の湯を催す。客は前権大納言坊城俊清・前権中納言高辻総長・三位風早実積。(御茶湯)

●十一月二十九日、茶の湯を催す。客は吉田幸節及び法眼木下道正庵承順。(御茶湯)

●十二月四日、芳林院の私宅での茶の湯に参加。供は玉の井・

於蓮・於千代・山科道安。(槐記)

●十二月大晦日、香を一座行う。(槐記)

★此年、河原御殿にある高殿「物外楼」の上層を取り外し、一層の建物に改築。(東京国立博物館「宮廷のみやび―近衛家一〇〇〇年の名宝」展図録)

★此年、家熙の怒りに触れ、宇治の茶師上林又兵衛が近衛家への出入りを止められる。(雑事日記)

★此年、右京権大夫錦小路頼庸及び岡本要人により、家熙の示教のもと歴代の草書を彙輯した『台草彙編』一冊が成る。跋は百拙元養。(遺墨・新『書道全集』22)

享保二十年(一七三五)乙卯 六十九歳

●一月七日、御茶湯始。客は山科道安及び大町淳庵。(御茶湯・槐記)この日をもって『槐記』の記述が終了。

●二月一日、左中弁広橋兼胤を介して准三宮の辞退を申し出る。(雑事日記)

●二月十一日、准三宮辞退が勅許される。(雑事日記)

●二月十三日、中御門院より杖を勅賜される。(雑事日記)

●三月五日、中御門院より、院の殿上日給札の書写を命ぜられる。(雑事日記)

●三月二十日、院の殿上日給札の清書が完成し、左中将八条隆英を介して献上。(雑事日記)

●三月二十二日、二十一日に即位した外孫の桜町院(若宮)へ御太刀馬代銀一枚・「御掛物三幅対」・彩色「訓蒙図彙」・一荷二種を献上。(雑事日記)

●閏三月十二日、鳴滝の法蔵寺へ近衛邸旧殿の一部を寄進し、

移築。(繰出)

●閏三月二十四日、河原御殿に木村探元が来邸し、対面。(京記)

●四月九日、木村探元が帰国の挨拶のため河原御殿に来邸し、餞別として「合羽達磨之写」・「東坡之竹」一枚・「梅道人竹」二枚・「宜文之写唐竹三尺」・「唐絵筆」四管・「唐筆福祿寿」と名箱入一管を贈られる。特に「写」とあるものは「准后様御好」のもの。(京記)

●四月十日、右馬権頭中川長統を介し、木村探元へ餞別(詳細不明)を贈る。(京記)

●四月十一日、前日に餞別を贈られた御礼言上のため、木村探元が河原御殿に来邸。(京記)

●五月十一日、醍醐家諸大夫の越後守高津時芳より朝鮮ひじき一箱を贈られる。(雑事日記)

●五月十六日、祖母の瑤林院三十三回忌に際し、供養料として金三両・蒸籠二組・御茶二器を奉納。(雑事日記)

●七月十一日、金森宗和作の茶杓を購入。(陽明文庫蔵・『豫楽院公茶杓筆筭』)

●八月二十一日、茶の湯を催す。客は上田養安及び山本恕軒。(御茶湯)

●八月二十三日、昨年十一月に完成した『春日権現験記絵巻』の表装が仕上がる。(雑事日記)

●十月七日、茶の湯を催す。客は上御霊社社家の雅楽頭小栗栖邦定・南都方楽人にて中御門院の笛の師範をつとめた主税権助辻高房・安平次主殿。(御茶湯・『地下家伝』)

●十月九日、茶の湯を催す。客は前権大納言坊城俊清及び三位

風早実積。(御茶湯)

●十月十八日、連歌師猪苗代兼竹の所望により『古今和歌集』賀部のうち二十首ほどを書写して贈る。料紙は家熙好みの「打曇鳥の子五色軸表紙」。(雑事日記)

●十月二十二日、茶の湯を催す。客は上田養安及び山本恕軒。(御茶湯)

●十一月四日、桜町院即位の祝儀として、桜町院へ御太刀馬代銀一枚・『皇朝類苑』一部・唐硯一枚・一荷二種を、中御門院へ干鯛一箱をそれぞれ献上。(雑事日記)

●十一月十九日、茶の湯を催す。客は法眼木下道正庵承順及び大町淳庵。(御茶湯)

●十一月二十二日、茶の湯を催す。客は前権中納言高辻総長及び風早宰相(実績か。ただしこの時右中将)。(御茶湯)

●十二月二十六日、以前より長崎奉行の因幡守細井安明に命じて探させていた唐筆(百本入一箱分)を贈られる。(雑事日記)

★この年に出版された『部類現葉和歌集』に、家熙詠二十六首が入集。

元文元年(一七三二)丙辰 七十歳

●一月七日、茶の湯を催す。客は上田養安・山科道安・山本恕軒。(御茶湯)『御茶湯之記』の記述はこの日をもって終了。あるいはこれが、家熙にとって生涯最後の茶事となったか。

●一月二十三日、丹波・氷上郡にある瑞岩山高源寺住持の相洲が来邸し、紫衣勅許の札として唐墨及び印石を贈られる。(雑事日記)

●一月二十五日、右衛門督田安宗武と孫娘の森君との婚儀の札

として、宗武より太刀一腰・金馬代一枚・巻物五・一荷二種を、森君より巻物五・一荷一種を贈られる。(雑事日記)

●四月四日、桜町院より、新年号の文字に関する内々の勅問が下される。(『通兄公記』)

●七月十二日、桜町院へ、中元として玉文唐紙一箱及び干鯛一箱を献上。(雑事日記)

●八月七日、この日前後より体調不良が続く。初めは「口中疾」であった。医師の山科宗安・三輪了詮・生駒玄竹が伺候し、薬を調合。(雑事日記・『通兄公記』)

●九月十八日、妙法院宮堯恭親王より見舞いの使者として中村帯刀が遣わされる。(『堯恭法親王日記』)

●十月三日、未刻薨去、享年七十。死因は「陰虛火動症」。古来より出家した者に対しては廃朝しないことが朝廷の先例だったが、家熙は桜町院(禁裏)の外祖父であることにより、十月五日まで三日間の廃朝が決定。(雑事日記・家譜・『通兄公記』・『統史愚抄』・『堯恭法親王日記』)

●十月六日、申半刻、入棺。戌刻、密葬。(雑事日記)

●十月十一日、夜、大徳寺の近衛家廟所に葬られる。(『通兄公記』・『統史愚抄』)

●十月十二日、京都所司代の丹後守土岐頼稔を介して、將軍徳川吉宗及び世子家重の弔意が伝えられる。(雑事日記)

●十一月二十二日、家熙の七七忌にあたり、三時知恩寺門跡尊融尼の命で、家熙の形見の袍の絹に家熙の肖像画が作成。画は渡辺始興(求馬)、賛は百拙元養(日付は賛に基づく)。(三時知恩寺門跡蔵／重要文化財)

●十二月二日、家熙遺物として閑院宮直仁親王へ狩野養朴常信

筆の張果老三幅対及び古銅花生が、直仁親王王女の始宮(母は八百君)へ重箱が、鷹司某(有隣軒輔信か)へ「掛物」(詳細不明)がそれぞれ贈られる。(雑事日記)

●十二月五日、家熙遺物として妙法院宮堯恭親王へ「事言要玄」(三十九本、一箱)及び唐筆(十本、一箱)が贈られる。(『堯恭法親王日記』)

●十二月七日、山科道安を介して、内々に京都西町奉行の筑後守本多忠英へ家熙の遺物が贈られる。(雑事日記)

●十二月十六日、豊後・岡藩主の内膳正中川久忠より御侮使が派遣される。中川久忠は正徳三年の家熙江戸下向の際、馳走人をつとめた人物。(雑事日記・実紀)

●十二月十七日、家熙遺物として、桜町院へ狩野尚信筆の三幅対及び紫檀硯料紙箱を、中御門院へ丸形後歴銀星研・孟玉潤筆の霞瀧図・常修院宮慈胤親王作二重花入をそれぞれ献上。(雑事日記)

「了」

※全五回にわたる連載にあたり、多くのお世話をいただいた編集部の方々に深謝し上げる。

(みどりかわ あきのり・日本学術振興会特別研究員PD)